

平成23年10月24日

浜田市議会議長 牛尾博美 様

視察報告者 江角敏和 

## 視 察 報 告

下記のとおり視察を行いましたので、その結果を報告いたします。

### 記

1. 期 日 平成23年7月31日（日）～3日（水）
2. 視 察 先 福島県相馬市
3. 視 察 者 牛尾博美 川神裕司 西田清久 佐々木豊治  
芦谷英夫 岡本正友 布施賢司 笹田卓  
江角敏和
4. 視察目的 3. 1 1 東日本大震災への対応について

### 5. 調査研究活動の概要

#### (1) 視察に至った経緯

3月11日に発生した東日本大震災は、死者15,826人、行方不明者3,610人、建物全壊数118,704、半壊数183,033(10/20現在)といった甚大な被害をもたらした。この被害は、津波によるものが大きく、それに加えて福島第1原発事故を招き、今なお放射能物質漏れは終息をみていない。

こうした大震災を受けて、浜田市議会6月定例会は、多くの議員が防災に関する一般質問を行った。この質問のなかで、議員自ら被災地へ出向きボランティア作業を行ってきた経験も踏まえ質問に立った議員が、福島県相馬市(ボランティア作業を含む)への視察を議運にはかり全議員へ呼び掛けた。

視察目的を、「被災された現地を実際に見て体を動かし、皆さんの生の声や教訓を伺うことで、さらなる支援の在り方を検討することと同時に見聞や体験したことを、これからの浜田市の防災へ活かそう！」と明示し、賛同を得て10名の議員が強行スケジュールのなか視察に



出掛け学んだ。

## (2) 視察の概要

視察の概要は、被災現場の視察、相馬行胤(そうまみちたね)さんや川嶋麻紗美さんら NPO 団体、そして立谷秀清(たちやひできよ)相馬市長より、災害発生時の対応や復旧の状況を伺い、前段には南相馬市で復興ボランティア作業も行った。ちなみに、10月19日現在(人口は3月1日現在)の相馬市及び南相馬市の被災者数等は以下の現状である。

市名	事項	人口(3/1 現在)	全半壊数	死亡者数	不明者数	避難者数
相馬市		38,087 人	1,692	456 人	3 人	0 人
南相馬市		70,772 人	5,657	640 人	23 人	19,584 人

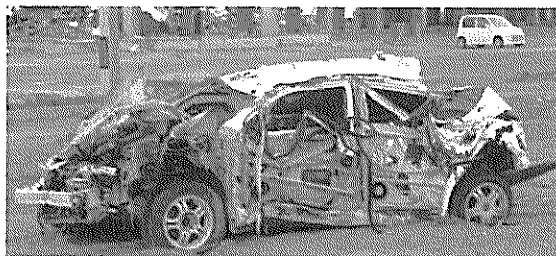
## 6. 視察内容

### (1) 被災現場の視察

7月31日午後1時50分に浜田市役所の駐車場をレンタカーで出発し、翌朝8月1日午前6時40分に相馬市へ到着した。予定していたボランティア作業(南相馬市)までに、時間があつたことから宿泊場所としていた「岬荘」の場所確認と、所在地である相馬市小浜松川浦の被災状況を視察した。また、ボランティア作業中や翌日2日の空き時間に相馬市と南相馬市の被災地も視察した。



まず、岬荘近くで水産関連の施設がある平地(流されてか?)に、右写真のような乗用車全体が押し潰されたような様子が目をひいた。



翌日、八谷相馬市長が、「亡くなられた方のほとんどは圧迫死であった」と言われたことと後で重なった。それだけ津波の水圧はもの凄いということであり、津波の高さだけを問題にしてはならないことを学んだ。



この地方は、平野が多いため

か、海が肉眼では見えない地点の陸地まで、前ページ下段、このページ上段の写真のように、船が押し流されていた。

さらに、ボランティア作業で、廃棄物の運搬中に見た、福祉施設(写真2段目)では、多くの方が亡くなられたと伺った。

こうしたことから考察すると、津波に対する避難、そして子供や高齢者施設の設置場所は、海岸からどれくらい離れているかといった距離よりも海拔がどれくらいかという高さを重視しなければいけないことも、実際に見て良く分かった。

現実には、浜田市で海岸から近い施設では、日頃からどこへ、どのように、迅速に避難するか、訓練とマニュアルの精度を高め継承していくことが重要である。

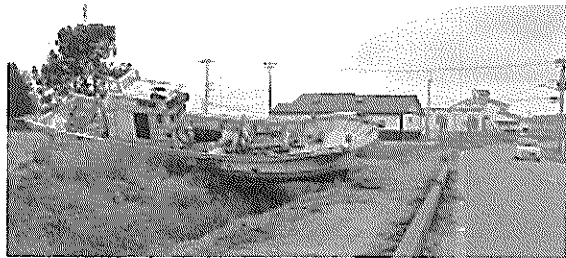
また、火電に石炭を船から降ろすクレーンが津波で折れ曲がっている光景や、福島第1原発の避難区域(半径20km圏内)への一時帰宅で、警戒中の様子も遠くからだが見ることができた。

福島県で地震や津波、放射性物質の健康被害を心配し県内外へ避難されている人数は、9万9,200人。福島第1原発事故で、避難対象になっている警戒区域(半径20km)と計画的避難区域対象者数は、計約8万8千人(6月8日時点)だという。膨大な人数である。

これからの生業で放射能の線量に関係する産業・職業は厳しい実態が横たわっている。この現実を直視するならば、真に「安全第一」の観点で電力確保の在り方を根本から考え直す必要があると実感した。

## (2) NPO団体の経験談と意見交換

8月2日は、朝8時に岬荘をレンタカーで出発し、被災現場を見て9時半に相馬中村神社に到着。この神社の宮司であり、そしてNPO法人、「馬とあゆむSOUMA」の川嶋麻紗美さんと、相馬34代目当主、



相馬行胤さんから当時の活動について伺った。

経験談を聞き意見交換を通じて感じたことは、今回のような非常事態時に、一定のルールに基づいて対応する行政や公的機関頼り一辺倒でなく、自由裁量の大きいNPOや民間及び市民団体の存在や動きが重要であり、活動を通じながら両者が連携を深めていくことの重要性であった。一早く物資や人的支援の受入をこのNPOの皆さんが行い動かされた話に、それを強く感じた。

さらに、「国や県の支援がまだ無いなか、県内外の各自治体などから物資が届いた」と言われたが、今回のような非常事態時に初動支援を果たす、行政組織、いわゆる市町村(人・物)の役割・優位性も認識できた。

さらに、実際に動かされたNPO団体の皆さんから見た、国の対応、市長や議員に対する評価も良く分かった。

### (3) 相馬市の対応

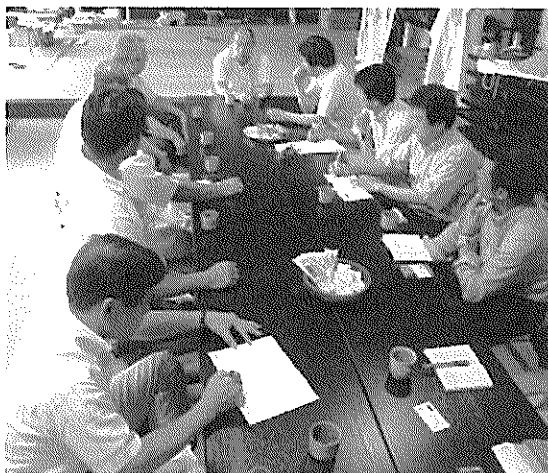
#### [議会]

午後1時から被災現場の視察を行い、4時前に波多野広文相馬市議会議員と面談した。7月31日まで毎日、朝昼に対策会議を開き、のちに復興会議を立ち上げて、議員20名が「何が出来るか」考え、「避難所や地区周りをした」というお話が聞けた。

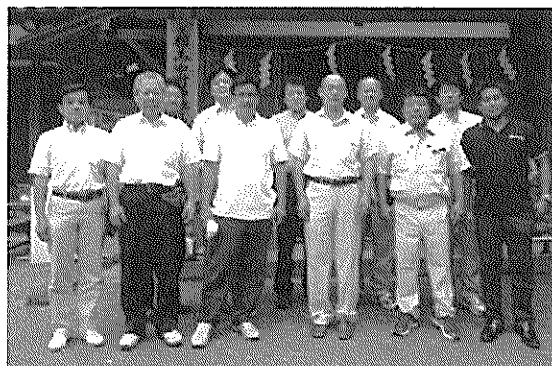
資料でも3月15日には、市議会で、「被災者生活支援金等支給条例」を、さらに4月26日には、「震災孤児義援金条例」を可決されている。

#### [行政]

午後4時過ぎから、八谷秀清市長より、「東日本大震災～これまでの対応を振り返る」と題し、資料を基に時系列で臨場感ある、しかも確信に満ちた話を



▲相馬行胤さん(写真中央上)から当時の様子や対応、教訓を伺う。  
▼行胤さんを中心に記念写真。



▲中央の上左が波多野広文議長。

伺った。

何より目を見張ったのは、対応の早さだった。14時46分に三陸沖M9.0(相馬市6弱)の地震が発生して僅か9分後に、第1回目の「災害対策本部会議」が開かれ、「生存者の救出」など本部長指示が寄せられたことである。

相馬市長が話されたことで、印象に残り、重要だと感じたことは、「新たな死者を出さないためには、初期の24時間、48時間、1週間が勝負」であることと、「困っている時に友人の市長達(自治体)が助けてくれた」ということであった。また、NPOの方も言われていた、強いリーダーシップ(正しい判断)があった。

それ以外にも沢山のご教示をいただいた。浜田市の行政側とも「共有すべき」と判断し、帰浜後「東日本大震災～これまでの対応を振り返る(資料)」を担当課へ提供した。後世へ繋ぐ初期対応の共有化、そしてマニュアルの構築が重要である。

#### [学んだこと]

最後に、総じて学んだ点は、繰り返しになるが初期の対応である。これを議会として、どのようにマニュアル化できるのか強く考えさせられた。

浜田へ帰り、市議会の特別委員会で策定中だった「浜田市議会基本条例」に、「危機管理対応」を加えることができたことも、「時を得た視察だった」と言える。さらに、その後、浜田市議会としての義援金活動へ繋がったことも、この視察が大きかったと実感している。

今回、視察の全日程で得た教訓を、今後市議会及び議員活動へ活かしていきたい。



▲立谷市長(写真中央)から、当時の様子や対応について伺う。



▲ボランティア終了後、作業を依頼された宍戸正さん(建具店代表：中央上)と記念写真。



▲相馬市では、4千人余りの方が、仮設住宅で生活されている。

以上